

コイヘルペスウイルス(KHV)病

1.コイヘルペスウイルス病

コイヘルペスウイルス(Koi HerpesVirus)を原因とし、コイ(黒コイ、錦ゴイ)のみが感染する疾病である。発生しやすい水温は18～25℃で、行動緩慢、摂餌不良になり、鰓の退色やびらん、粘液の分泌異常、眼球の陥没などが見られ、死亡率が高い。1998年にイスラエルやアメリカでコイの大量斃死があり、2000年に新しいウイルス(KHV)であることが確認された。

2.日本への侵入

KHV病は、持続的養殖生産確保法(平成11年法律第51号)において特定疾病(国内における発生が確認されておらず、又は国内の一部のみに発生している養殖水産動植物の伝染性疾病であって、まん延した場合に養殖水産動植物に重大な損害を与えるおそれがあるものとして農林水産省令で定めるもの)に指定されている。日本では、2003年5～7月にかけて岡山県の河川等で斃死したコイからKHVが検出され、同年10～11月には茨城県霞ヶ浦で養殖されていたコイがKHV病により大量斃死した。

3.滋賀県での発生

2003年11月に霞ヶ浦からコイを購入していた養殖業者のコイを検査した結果、6業者からKHVが検出された。同年11月下旬には瀬田川で斃死していたコイからKHVが検出され、滋賀県の天然水域で初めてKHV病の発生事例となった。その後水温の低下と共にコイの斃死は確認されなくなった。翌2004年4月に瀬田川、南湖、北湖で斃死していたコイからKHVが検出され、水温の上昇と共に、大量のコイが斃死した。4～8月にかけて琵琶湖で斃死し回収されたコイは約10万尾であった。

4.琵琶湖でKHVにより斃死したコイの特徴

2004年に琵琶湖で斃死し回収されたコイ

の大部分は全長50cm以上の大型のコイであった。中型や小型のコイの斃死は確認されなかった。そこで、琵琶湖のコイのKHVに対する感染状況を調査したところ、小型や中型のコイはKHVに感染していない可能性が高いことが明らかとなった。このことから、琵琶湖にはKHVに感染履歴のないコイが存在し、今後もKHV病が発生すると考えられた。実際に、2005年、2006年にも琵琶湖でKHV病が発生し、斃死したコイの大部分が50cm以下のコイであり、KHVに感染履歴の無い個体が斃死したと思われた。

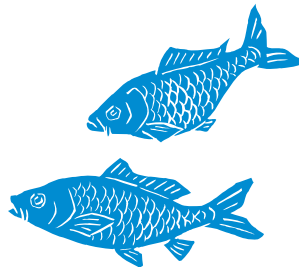
5.KHV病を防ぐには

KHV病は治療法が無く、一度侵入したウイルスを根絶させることは困難である。そのため、KHV病を防ぐにはウイルスを侵入させないことが重要である。滋賀県では、琵琶湖海区漁業調整委員会および滋賀県内水面漁場管理委員会の指示により「琵琶湖・内湖・瀬田川のコイを持ち出し他の水域に放流すること」「飼っているコイや死んだコイを川や池などに放したり捨てたりすることを禁止している。

6.KHVは人には感染しない

KHV病はコイに特有の疾病であり、他の魚には感染しない。また、KHVは30℃以上では増殖できないため、仮に感染したコイを人が食べたとしても影響はない。

(水産試験場)



(上)賤ヶ岳の紅葉 (左下)琵琶湖の渡り鳥 (右下)新庄コスモス畑